

My Life, My Purpose: A Tanzanian President Remembers

Benjamin William Mkapa

Dar es Salaam: Mkuki na Nyota Publishers 2019 320p.

2020年7月23日、タンザニアのベンジャミン・ムカパ第3代大統領（在職1995～2005年）がマラリアの治療中に心不全のため急逝した。81歳だった。本書は、ムカパが亡くなる8カ月前に刊行された自伝である。ジョアキン・シサノ元モザンビーク大統領の序文、全16章、写真と付録からなる本書には、ムカパの生い立ちから大統領退任後までが綴られており、独立前から始まるタンザニアの歴史の中で、ムカパがどのように大統領の座まで上り詰め、どのような指導者であったのか、そのすべてが凝縮されている。

ムカパはタンザニア南部のムトワラ州の村に生まれ育ち、カトリックのミッション・スクールで学んだあと、当時、東アフリカ唯一の大学であったウガンダのマケレレ大学に進学し、英文学・言語学・音声学を専攻した。そこで初めて政治に関心を持ち、卒業後、外務省職員、与党タンガニーカ・アフリカ人民族同盟（TANU）の英字紙「The Nationalist」の編集長、ナイジェリア・カナダ・米国駐在大使、外務大臣、情報文化大臣などを歴任した。ムカパの経歴を見ると、英語のコミュニケーション能力の高さが一つの鍵となっていたことがわかる。大統領退任後には近隣国の紛争調停を行うなど、国際舞台で活躍したが、ここでもその能力が生かされたのではないかと。

本書を通じてムカパ政権期をふりかえると、ムカパがジュリウス・ニエレレ初代大統領（在職1962～1985年）とは違った意味で、タンザニアという国の基礎を築いた指導者であったことを実感する。民主化後初の複数政党制選挙で大統領に選ばれ、現在まで続く主要な社会経済政策を策定し、いわば今のタンザニアの政治経済を形作ったのはムカパ大統領であった。政府資金が枯渇する中、ムカパは国営企業の民営化をはじめとする様々な改革を推し進め、多くの批判も受けたが、本書によれば、その根底にはタンザニアが外国の援助に頼らずに、「自立（self-reliance）」すべきであるという確固たる信念があった。

また、本書にはムカパが幼少の頃から人種や宗教間の不平等を目の当たりにした経験が度々記されており、その人生を通じて特に平等に価値を置いていたことが印象に残った。ムカパが師と仰いだニエレレとの会話に関する記述も興味深い。本書は「私がこの世にいかなる変化をもたらしたか、その判断は私の神と読者に委ねよう」という言葉で締めくくられているが、ムカパ亡き今、タンザニアの過去をふまえて現状を考察する上で、本書から得られる知見は大きい。

粒良 麻知子（つぶら・まちこ／アジア経済研究所）

